北陸中日新聞　2009年(平成21年)5月28日(木曜日)

©中日新

# 震災後ストレス 能登でも急増

## 循環器系の患者 2－3倍に

### 当時輪島勤務 土田医師ら 直後の5週間調査

二〇〇七年三月に起きた能登半島地震直後の約一カ月間、被災地で通常の二―三倍以上、心筋梗塞や脳内出血など循環器系疾患が発生していたことが、厚生連高岡病院（富山県高岡市）の土田真之医師(三)らの調査で分かった。死者は少なくとも四人。一人だった地震による犠牲者を上回った。ストレスが原因と考えられる。土田医師は日本循環器学会機関学術誌の電子速報版に論文を発表した。（報道部・本安幸則）

土田真之医師

循環器内科が専門の土田医師は〇七年三月二十五日の能登半島地震発生時、石川県輪島市の市立輪島病院に勤務していた。地震から五週間に病院で受け入れた心筋梗塞や心筋症などの「急性冠症候群」と、「脳内出血」の患者数をまとめ、過去三年間の平均値と比べた。

それによると、急性冠症候群の患者は五人（男性二、女性三人）。地震から約一時間後に胸の痛みを訴え来院した女性(五七)ら、最初の一週間で三人が来院した。過去三年間の平均値は、半分以下の二人だった。死者は一人だった。

一方、脳内出血の患者は平均二・三人に対し、震災後は八人（男性三、女性五人）と三倍以上だった。死者は三人。地震直後だけでなく一カ月程度、発生が続く傾向があった。

循環器系疾患の増加と大災害の関連は、アメリカ・ロサンゼルスでのノースリッジ地震（一九九四年）、阪神大震災（九五年）での報告がある。高齢者が多く都市圏と同様の結果になった。今回の調査によると、患者の平均年齢は急性冠症候群が七一・六歳、脳内出血は七二・二五歳だった。

土田医師は「震災後、早い段階から医師や看護師、保健師らが現地に入り、健康チェックなどでリスクを減らすことが大切」と指摘。論文を指導した金沢大医薬保健研究域の山岸正和教授(五七)は「医療従事者も災害時の経験を重ね、円滑な対処が必要だ」と話す。

能登半島地震後5週間の循環器系疾患の患者数(人)

（市立輪島病院）